

ナーラーヤナ・パンディタについて

本田 義央

0. はじめに

本稿で取り上げるナーラーヤナ・パンディタ(Nārāyaṇa Paṇḍita、十七世紀中頃)は、カーリダーサ(Kalidāsa、五世紀頃)の作品のうち二つのマハーカーヴィヤ、すなわち『ラグヴァンシャ』と『クマーラサンバヴァ』に対する注釈家の一人である。カーリダーサの両作品に対する注釈は、既刊未完のものを含めかなりの数が数えられる。それらのなかで、標準的な注釈とみなされしばしば参照されるのはマッリナータ注であろう¹。さらに、近年、現存する注釈のうちでは最も古いものとされるヴァッラバデーヴァの注釈が目を集されている²。それに加えて筆者が目にするのは、ナーラーヤナ・パンディタによる注釈『ヴィヴァラナ』(Vivarāṇa)である³。ナーラーヤナ・パンディタの注釈は、非常に詳細で、詩節に描かれる内容について深い洞察を具体的に提示し、また作品の全体としての構成についても注意が払われており、カーリダーサの作品を読む上で、ひいては韻文カーヴィヤを読むうえで有用である。筆者は、将来、このナーラーヤナ・パンディタ注によるカーリダーサ作品の解釈を提示したいと考えている。

¹幾度となく刊行されているマッリナータ注ではあるが、各刊本は先行刊本の複製である気配が濃厚であり、既存刊本間の関係の確定、そして一次資料と一応みなしうる写本資料にもとづいて再度校訂される余地はあると思われる。

²Goodall and Isaacson (2003)。

³『ヴィヴァラナ』注は、まずŚāstrī, ed. (1913)として刊行されたが、絶版となって久しかった。しかし、Dwivedī, ed. (2004)が出版され、容易に接することが可能となった。Dwivedī, ed. (2004)は、校訂の根拠について明示しないながらも、Śāstrī, ed. (1913)の難読箇所について新たな読みが提案されている場合があり参照する意味がある。

本稿においては、先行研究(ĀŚ, Wariar (1930), Narahari (1945), K. K. Raja (1980))にもとづいて、ナーラーヤナ・パンディタという人物について若干の覚え書きを記すこととしたい。

1. 呼び名について

ナーラーヤナ・パンディタは、『マーナメーヨーダヤ』後半の作者としてよく知られているが、ĀŚ(Intro., i)によれば、その名前自体、同書前半の著者でありより著名なナーラーヤナ・バッタ(Nārāyaṇa Bhaṭṭa)と区別するために、後の者によって敬称「パンディタ」が付されて呼ばれたものである⁴。

1. 年代と生涯

ナーラーヤナ・パンディタ活動年代は、十七世紀の中頃である。ナーラーヤナ・パンディタは、『マーナメーヨーダヤ』後半部でカリカットのマーナヴェーダ(Mānaveda)王に対して「陸海の支配者マーナヴェーダ王よ」と呼びかけている⁵。このマーナヴェーダ王は『クリシュナギー

⁴ナーラーヤナ・バッタは、『マーナメーヨーダヤ』前半部の他に『ナーラーヤニーヤ』(Nārāyaṇīya)および『プラクリヤーサルヴァスヴァ』(Prakriyāsarvasva)の著者として著名である。その活動についてはK. K. Raja (1980, 119-152)に詳しい。

⁵Mānameyodaya 313.9-314.2: velāṅghipayah-payodhivisaratkallolatulyodayair ālāpāviṣayair yaśobhir akhilaṃ lokam pariṣkurate / līlānirjitaśāstravāya ca vyaṃ tubhyaṃ kim āśāmahe śailābdhīśvara mānavedanṛpate jīyāḥ sahasraṃ samāḥ // (C. K. Raja and Sastri's trans.: "For you who adorn the entire world with your fame which rises like the waves beating in the milk-ocean overflowing the shores and which is beyond the scope of speech, and who as if in sport have conquered your foes, what is it that we can wish for you? Oh Lord of the hills and the ocean, King Mānaveda, may you reign supreme for a thousand years.")

テイ』(*Kṛṣṇagīti*)の作者であるマーナヴェーダに同定され、ナーラーヤナ・パンディタの庇護者であると同時に、『マーナメーヨーダヤ』前半部の作者であるナーラーヤナ・バッタの庇護者でもあった。同王によるカリカットの統治年は1655年から1658年であり、この期間に『マーナメーヨーダヤ』後半部は著されたと考えられる⁶。

ĀŚ (Intro., iii-iv)によれば、彼の父はニーラカントという学者であり、詩人プルショータマの娘カーリーを母としていたとされる。彼にはシュリークマラーという兄がおり、スブラフマンヤ、ラーマーチャールヤ、クリシュナ等の名の師についてミーマーンサー学やカーヴィヤを身につけた。活動した地域は、今日のケーララ州中北部である⁷。

2. 著作

ナーラーヤナ・パンディタの著作で、現在われわれに伝えられているものは次の四つである。

ミーマーンサー学派バットタ派の綱要書『マーナメーヨーダヤ』(*Mānameyodaya*)の後半部、すなわち認識対象 (*meya*) 部。本作品は当初ナーラーヤナ・バッタによって企図されたが、彼は完結させることなく没し、のこされた後半を庇護者マーナヴェーダ王に請われてナーラーヤナ・パンディタが自らの筆によって完結させたと考えられている。

つぎに、カーリダーサの『ラグヴァンシャ』に対する注釈『パダールタディーピカー』(*Padārthadīpikā*)と、『クマラーサンバヴァ』に対する注釈『ヴィヴァラナ』(*Vivarāṇa*)とがある。Goodall and Isaacson (2003)によって、ヴァッラバデーヴァとの関連においてそれらの特徴が指摘されている。アルナギリナータ (*Aruṇagirinātha*) 注『プラカーシカー』(*Prakāśikā*)に対する複注というべきもので⁸、注

⁶K. K. Raja(1980, 132-133)

⁷ĀŚ (Intro., iv)によれば、『クマラーサンバヴァ』注の冒頭詩節から、具体的な地名として Puraśrenīvipina (現在のどこにあたるか不明)、Brahmakhala (現在の Guruvāyūr 付近)、Bālamandanīlaya (現在の Trīccerumannam) の三つが彼の活動地としての可能性を指摘されている。

⁸アルナギリナータの年代については、Sastri, G. (Preface)によれば、ケーシャヴァスワミン (12世紀頃)か

釈の冒頭に詩節の基本構文を詩節を構成する語の順序を変えた散文で提示する。

さらに、ナーラーヤナ・パンディタ独自の作品として、『アーシュレーシャーシャタカ』(*Āśleśāśataka*)がある。この作品は、ナーラーヤナ・パンディタの妻アーシュレーシャーの名を冠した文字通り百詩節からなる韻文文学作品である。内容はナーラーヤナ・パンディタが、離れた妻に呼びかけるものであり、主要なラサは愛 (*śṛṅgāra*) である。⁹

また、ナーラーヤナ・パンディタの著作で現存せず、内容も不明なものとして次の四つがある¹⁰。

Śrīmāsotsavacampū

Śrīmadbhāgavataprabandha

Nṛṣimhacampū

Vaidehīnavasāṅgacampū

これらに加えさらに、Wariar (1930, 93) は、バヴァブーティ (*Bhavabhūti*, 八世紀前半頃) の『ウッタララーマチャリタ』(*Uttararāmacarita*) に対する注釈『バーヴァールタディーピカー』(*Bhāvārthadīpikā*)¹¹、カーヴィヤ作品『ゴヴィンダチャリタ』(*Govindacarita*)、ニャーヤ学説に関する著作『タモーヴァーダ』(*Tamovāda*) の三作品をナーラーヤナ・パンディタに帰すが、ĀŚ (Intro, ii-iii) および K. K. Raja (1980, 148-150) によって Wariar 説はほぼ否定されている。

3. 評価

前節ではナーラーヤナ・パンディタに関連する著作について整理した。本節では現在に作

らの引用が見られること、およびマツリナータが引用することから 12 世紀から 14 世紀の間ということになる。

⁹ナーラーヤナ・パンディタの妻との別離状態が、妻の死によるものか、あるいは一時的な別れによるものかは定かでないが、ĀŚ (Intro., x) は作品の主要なラサが愛であるという点から後者を支持する。

¹⁰ĀŚ (Intro., ii)。これらは Narahari(1945, 103-104) が指摘するように、『クマラーサンバヴァ』第三章、五章、六章、八章に対する『ヴィヴァラナ』注末尾の詩節において言及されている。

¹¹K. K. Raja (1980, 148-149) によれば、この『ウッタララーマチャリタ』注の著者であるナーラーヤナは、『マーナメーヨーダヤ』前半部の著者であるナーラーヤナ・バッタの弟子であり、目下のナーラーヤナ・パンディタとは同時代の別人である。なお同注の写本は Government Oriental Manuscripts Library (Chennai) R3829 がある。

品が伝えられる四作についてその評価を概観する。

『マーナメーヨーダヤ』がバツタ派ミーマーンサーの認識論綱要書として有意義なものであり、広く受け入れられてきたことは言を待たないであろう。

カーリダーサの二つのマハーカーヴィヤに対する注釈については、『ラグヴァンシャ』に対するヴァッラヴァデーヴァ注との比較を中心に、Goodall and Isaacson (2003) が随所で論じている。Goodall and Isaacson (2003, xxxi) がいうように、そもそもカーリダーサが著した作品の元々のかたちを回収することは困難である。しかし、現存最古の注であるヴァッラヴァデーヴァ注がより原形に近い読みを伝えているということはいえよう。注釈家たちは、それぞれが接したかたちでのカーリダーサの作品に対して注釈を施し、文法的に問題を感じる場合や地理上の不整合など彼らが原文に納得できない場合には詩節そのものを修正したり、あるいは詩節の順序を変更したり、あるいは新たな詩節を付加したりしたようである。そして、それらの改変を加えられた作品が改変以前の作品よりも自然な形となっている場合がある。ナーラーヤナ注もまた南インドの伝承を反映し、カーリダーサの原形詩節からは離れる場合がある。

『アーシュレーシャーシャタカ』については、その内容や表現がĀŚ (Intro., xx-xi) において高く評価されているが、十分な研究がなされていないわけではない。ナーラーヤナ・パンディタ独自の作品として今後の研究がまたれるところである。

4. まとめ

カーリダーサの著作は、その高い評価を裏付けるべくインドの諸地域に伝えられ、Abhijñānaśākuntala の四つの伝本は極端な例としても、地域・年代・注釈家の解釈によって、相当な相違が見出される。カーリダーサ著作の原形を探る試みは、当然重要かつ興味深いものであるが、しかし本当の意味での「原形」ということについては、それを確定することは相当に困難である。その試みも一つの方向として視野

に入れつつ、筆者は、注釈家たちがどのようにカーリダーサの作品を解釈したかという方向に深く関心をもつ。とりわけ韻文作品は読者に一様の解釈を強いるものではなく、テキストの相違がある場合はもちろん、そのない場合でも注釈家たちはそれぞれのかたちでカーリダーサを読んでいる。ナーラーヤナ・パンディタによる解釈を検討することは、この点でも興味深いものであろう。

略号及び参考文献

Āśleṣāśataka of Nārāyaṇa Paṇḍita. (ĀŚ)
Journal of the Travancore University Oriental Manuscripts Library 2-1 (1946): 1-12.

Kumārasambhava of Kālidāsa:

(1) *The Kumārasambhava of Kālidāsa with the Two Commentaries, Prakāśikā of Aruṇagirinātha and Vivaraṇa of Nārāyaṇa of Nārāyaṇapaṇḍita.* Gaṇapati Śāstrī, ed. 3 vols. Trivandrum Sanskrit Series 27, 32, 36. Trivandrum, 1913-14.

(2) *Kumārasambhavamahākāvyaṃ of Mahākavi Kālidāsaī.* R. Dwivedī, ed. Sarasvatībhavana Granthamālā 148. Varanasi, 2004.

Kṛṣṇagīti of Mānaveda. C. R. Swaminathan and Sudha Gopalakrishnan, eds. New Delhi : Indira Gandhi National Centre for the Arts and Motilal Banarsidass Publishers, 1997

Raghuvamśa of Kālidāsa.

Raghuvamsa by Mahakavi Kalidasa with Prakasika Commentary of Arunagirinatha and Padarthadeepika Commentary of Narayana Panditha, Cantos 1 to 6. Achyuta Poduval and C. K. Raman Nambiar, eds. Sri Ravi Varma Sanskrit Series 3. Tripunithura: Sanskrit College Committee, 1964. ¹²

Dwivedī, R. ed., 2004. See Kumārasambhava (2). Goodall, D. and Harunaga Isaacson. 2003. *The Raghupañcikā of Vallabhadeva: being the Earliest Commentary on the Raghuvamśa of Kālidāsa.* Vol. 1. Groningen: Egbert Forsten.

¹²Narahari (1945, 101) およびĀŚ (Intro., 1n1) によれば、1945 以前に Trichur (Mangalodayam Press) から同様に第一章から第六章が刊行されており、続く章も刊行の予定というが詳細不明である。

Raja, K. C. and S. S. Suryanarayana Sastri. 1975. *Mānameyodaya of Nārāyaṇa: An Elementary Treatise on the Mīmāṃsā*. The Adyar Library Series 106. Madras: The Adyar Library and Research Centre.

Raja, K. K. 1980. *The Contribution of Kerala to Sanskrit Literature*. Madras University Sanskrit Series 23. Madras: University of Madras. (2nd ed.) .

Śāstrī, G. ed. 1913. See Kumārasambhava (1).

Narahari, H. G. 1945. The Padārthadīpikā of Nārāyaṇa. *Adyar Library Bulletin* 9: 101–106.

Wariar, A. Govinda. 1930. Literary Patronage under the Zamoins of Calicut. *Indian Historical Quarterly* 4: 87–96.

(ほんだ よしちか 広島大学 [インド哲学])